

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	Camusの《Misère de la Kabylie》をめぐって：他紙のルポルタージュとの比較
Author(s)	榎木, 栄一
Citation	フランス文学, 15 : 41 - 51
Issue Date	1985-05-15
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040944
Right	
Relation	



Camusの《Misère de la Kabylie》をめぐって

— 他紙のルポルタージュとの比較 —

榎 木 栄 一

I. 序

Alger-Républicain (以下 *A. R.* と略す) という社会党系の新聞に連載された Camus の《*Misère de la Kabylie*》(1939. 6. 5～15) は他の 2 紙のルポルタージュとも密接な関係を持っている。その一つは *L'Écho d'Alger* に載った R. Janon の《*Fragments pour un diorama de la Haute Kabylie*》(1938. 12. 12～25) であり、他は *La Dépêche algérienne* (以下 *D. A.* と略す) に掲載された R. Frison-Roche の《*Kabylie 39*》(1939. 6. 8～17) である。この二紙の記事と Camus の記事の関係については、J. Lévi-Valensi が *Cahiers Albert Camus*, 3 (以下 *CAC 3* と略す) の解説で簡単にふれているが、⁽¹⁾ 他には本格的に論じたものは無いようである。

本稿では、特に Frison-Roche と Camus の記事の非常にポレミックな関係に注目して、両者の関係を具体的に記事を比較しながら検討し、その中で Camus の記事の特徴の一面を明らかにしたい。

テキストは、⁽²⁾ Camus の記事では *CAC 3* 及びマイクロフィルム版を、Frison-Roche の記事ではオリジナルを使用することにした。

II. 《Misère de la Kabylie》

《*Misère de la Kabylie*》はその大部分が1958年の *Actuelles*, III (Chroniques Algériennes) に収載されているため、Camus のアルジェリア時代の記者活動の中では最もよく知られているものである。また後に *Fragments d'un combat* が *CAC 3* (1978) ⁽³⁾ として出版され、彼の *Alger-Républicain* 及び *Le Soir-républicain* における記事が全面的に再録されたため、カビリヤ報告も元の形で全体像をとらえることができるようになり、さらにこの報告が彼の当時の記者活動全体の中で占める位置の重要性も明らかになってきた。

このカビリヤ報告は、対象の地域は限定されてはいるが、問題は多面的、総合的に取り

あげられており、植民地支配の一典型を摘出していると言える。だからこそ Camus が58年にアルジェリア独立戦争への発言の一つとして、この報告を時事論集に再録したのであろう。これはアルジェリアにおける植民地問題を仏本国人に分ってもらうためには適切な記事だと判断したからでもあり、また、戦前からすでに自分はアルジェリアのために論陣を張ってきたのだと言いたいためでもあったのであろう。⁽⁴⁾

カビリヤ地方は、もともと人口過剰で山岳地帯のため食糧の自給ができず、出稼ぎによって生計を補っていた地域である。1930年代になって、フランスにも波及してきた世界恐慌の煽りをうけて出稼ぎが激減した上に、不作が続き、38年～39年にかけてこの地方は飢饉状態に陥っていた。⁽⁵⁾ そういった時に、38年12月、急進社会党系の新聞である *L'Écho d'Alger* に12日から25日にかけて10回にわたりカビリヤ地方のルポルタージュが連載されたのである。この記事には毎回デッサンによる挿絵が添えられていて、牧歌的な雰囲気を与えているが、一方ではすでにカビリヤの問題点はほとんど全て取りあげられている：人口過剰、出稼ぎの減少、高利貸の横行、劣悪な道路、水道の不足；教育、医療、財政の問題、等々。これらは後に Camus が取りあげた項目とほとんど重なっている。しかしこれらの問題に対する姿勢は Camus とは全く異っている。Janon の記事の特徴は、Lévi-Valensi の解説に見られるように、⁽⁶⁾ フランス側（即ち植民地支配者の側）の観点にのみ立脚していること、それに問題の原因を全て住民の《*mentalité*》に帰着させている、という点にある。彼女は Janon の記事は Camus に対して反面教師的役割を果たしていると言っている。⁽⁷⁾

たしかに *A. R.* 紙がカビリヤのルポルタージュを企画した裏には、競争相手の一つである中道右派的な新聞の半年前の記事に対抗する意識があったのは事実であろう。しかし、*A. R.* のこの記事の最も大きな政治的意義は植民地当局側に大きな反応を引き起こしたことである。それは、当局が反動的政策を代弁する保守的な新聞 *D. A.* に10日間にわたる対抗記事を書かせたことである。それは Camus の記事に対して3日遅れで10回にわたって連載されたものであり、彼のルポルタージュを論駁するためだけに書かれたものであると言える。

Camus の記事と Frison-Roche の記事との間のこのようなポレミックな関係には、政治的対決のドラマさえ感じさせるものがある。前者も当然に後者を意識しながら真っ向から対立し、先を走りながらも、何度も振り向きざまに切りつけるような激しい関係にある。一言でいえば、植民地支配体制と反植民地主義とがジャーナリズム上において決戦を切り結んでいるのである。

III. Camus の記事と Frison-Roche の記事

当局側は *A. R.* 紙のカビリヤに関するルポルタージュの準備作業を早くから察知していた。それは、*A. R.* 社内に当局に通じた者がいて、その密告によるものだと言われている。⁽⁸⁾ 当局側がそれだけ神経を尖らせていたということは、*A. R.* のそれまでの半年間の活動を警戒してきたということであり、*A. R.* が相当な社会的影響力を持っていたことを示すものとも言える。だから当局は Camus のルポルタージュに対する対抗記事を必要としたのであろう。Lévi-Valensi はこの当局の取った態度そのものが Camus の記事の «authenticité» と «efficacité» を証していると言っている。⁽⁹⁾

Frison-Roche のカビリヤの問題に対する基本的姿勢は、教育の普及による開明化的同化主義である。彼はカビリヤの進歩的側面は主として教育によるものであり、遅れている面は教育の不足に帰因するとしている。勿論その進歩の概念は進歩＝ヨーロッパ化という意味である。だから彼にとって問題はカビリヤ人が教育によってどれだけヨーロッパ人の水準に近づくかということでもある。このことについても Lévi-Valensi は、彼が問題を心理的次元でしか捉えようとしていない、と指摘している。⁽¹⁰⁾

この教育による同化主義のために、彼の第1回目の記事にはヨーロッパ人と見分けがつかない程の知的教養人となっているカビリヤ人が登場するのである。この完全にヨーロッパ化したカビリヤ人こそが模範であり、開明化 (évolué) と同化 (assimilation) の象徴的存在である。その意味ではこの第1回目の記事は巧みな導入部をなしており、この開明化主義の基調は、第3回目の女子教育、第4回目の女性の開明化の段階的例示、そしてそれが最終回に至り、開明化の一つの典型であるカビリヤ人旧将校のフランスへの賛美と追従の演説に到達するのである。

この開明化主義が受け入れられれば、非開明＝野蛮＝悲惨、開明＝文明＝繁栄という図式が成立することになり、全ての問題は開明化の程度の問題に解消されてしまう。その典型的な例が第4回目の記事であり、そこでは女性の開明化の程度による家庭の文明化が3段階に分けて例示されている。

勿論、Frison-Roche も悲惨に全く目をつぶっていたわけではない。人口過剰、食糧不足、生産不足、道路、住居、水道、下水、移民などの問題をあげ、産業の育成などの改善策 (第9回) も提示してはいる。しかしその問題の指摘も具体性を欠いたものが多く、ただ問題を羅列しただけの場合もある (第8回)。しかも彼の記事は、民話の紹介 (第2回)、谷間の市の情景 (第6回) など悲惨な現実とは無関係なものもあり、観光案内的要素も混入されている。

それではここで、具体的な記事の比較に入ろう。まず初回 (6月8日) の記事で、Fri-

son-Roche はカビリヤの悲惨を一般化することによって問題をすりかえ、Camus の報告の悲惨さをぼかそうとしている。

Je le dirai tout de suite. J'ai trouvé de la misère en Kabylie, certes, mais très impartialement parlant, pas plus que dans tout autre coin du globe où vit une population dense que son sol ne peut nourrir. La misère! Elle sévit également à Alger et dans le Tell, en France aussi surtout dans les grandes villes; [...]. (D. A., 8-VI-1939) (下線引用者)

これは Camus の第 1 日目 (6 月 5 日) の次のような記事に対する反論であり、あからさまに Camus と同じ表現 (下線部) を使って、挑戦的な姿勢を示したものである。

Mais je dois dire tout de suite que l'analogie s'arrête là. [...]. Et dans aucun pays que je connais, le corps ne m'a paru plus humilié que dans la Kabylie. Il faut l'écrire sans tarder: la misère de ce pays est effroyable.

[...]. Ces hommes, qui ont vécu dans les lois d'une démocratie plus totale que la nôtre, se survivent dans un dénuement matériel que les esclaves ne connaissaient pas. (A. R., 5-VI-1939) (下線引用者)

と Camus は類例のない悲惨さを強調し、切迫した状況を伝えているのである。この二つの文章だけでも両者の見解、立脚点の相違は明らかである。

Frison-Roche が直接的に Camus に反駁を加えていると思われる文章が少なくとも他に 2 箇所は見られるが、それは Camus の次の記事に対抗するものであろう。

[...], si on a fait quelque chose, cette tentative n'a abordé que des aspects infimes du problème et l'a laissé subsister tout entier. [...] Et si je voulais donner à cette enquête le sens qu'il faudrait qu'on lui reconnaisse, je dirais qu'elle n'essaie pas de dire: «Voyez ce que vous avez fait de la Kabylie», mais: «Voyez ce que vous n'avez pas fait de la Kabylie.»

En face des charités, des petites expériences, des bons vouloir et des paroles superflues, qu'on mette la famine et la boue, la solitude et le désespoir. Et l'on verra si les premiers suffisent. (A. R., 15-VI-1939) (下線引用者)

前文に対して Frison-Roche は次の二箇所では反論している。

Je ne suis pas du même avis que certains; la France a fait de grandes et belles choses en Kabylie, et il faudrait, pour nier une telle évidence, se boucher volontairement les yeux et s'obstiner à ne voir en tout que le mauvais côté des choses. (*D. A.*, 16-VI-1939)

彼はフランスが立派な政策を実行してきたと例証もなしに当然の前提として断定しているのである。さらに彼は Camus の記事の下線部分をもじって使い論駁の導入部としている。

Ce que nous avons fait de la Kabylie! mais une chose étonnante qui justifie pleinement l'oeuvre colonisatrice de notre pays; nous avons fait en un peu moins d'un siècle une véritable province française, au même titre que le Béarn, la Savoie ou la Normandie, et nous avons su si bien faire aimer notre pays, qu'il n'est pas un Kabyle, dans le douar le plus reculé, qui ne le prouve journellement. (*D. A.*, 17-VI-1939) (下線引用者)

彼はフランスによる植民地政策の成果として、カビリヤの完全な同化に成功したことをあげて、特別な問題は全く存在しないかのような印象を与えようとしている。

次に同一の問題について全く異った見解を示した典型的な例として、出稼ぎ減少の問題にふれた記事がある。まず Camus はその減少の原因を世界恐慌による失業の増大と仏政府の移民抑制政策にあると指摘している。

Mais avec la crise économique, le marché du travail en France s'est restreint. On a refoulé l'ouvrier kabyle. On a mis des barrières à l'émigration et, en 1935, une série d'arrêtés vint compliquer de telle sorte les formalités d'entrée en France que le Kabyle s'est senti de plus en plus enfermé dans sa montagne. (*A. R.*, 6-VI-1939)

具体的に取られた抑制措置は、上文に引き続いて彼が列挙したところによれば、郷里への送金に対する特別料金の設置、行政手続の複雑化、出稼ぎ者に対して、同郷の同姓者の滞納税金を支払うことの義務化、などである。⁽¹¹⁾これに対して Frison-Roche の方は

Le Kabyle revient dans son douar surtout parce qu'il y a laissé sa famille, sa femme, ses enfants, et qu'il n'est pas dans la nature de l'homme de vivre loin des siens.

[...]

Par conséquent on ne résoudra rien tant qu'on ne persuadera pas le Kabyle de partir avec sa famille ... et là nous touchons au point critique. Le Kabyle n'emmènera sa femme que lorsque cette dernière sera suffisamment évoluée, suffisamment instruite pour pouvoir s'adapter aux coutumes enropéennes. (D. A., 15-VI-1939)

と出稼ぎ減少の原因を住民の慣習と女性の教育不足に見ている。ここでも両者の対立は明瞭である。一方は仏本国の政府そのものが、経済不況のため移民の締め出し政策を取っていることが原因だと見ているのに対して、他方は移民の減少を住民の *mentalité* で説明しようとしている。後者は明らかに政府の政策を隠蔽しようとするものである。これでは出稼ぎ労働者からの送金が10分の1に減った⁽¹²⁾というような現象を説明することはできないであろう。

さらに両者の記事を比較して見た場合、片方にだけしか存在しない内容のものがある。Camus の方で言えば、悲惨の具体的な生々しい描写と賃金や生計の具体的及び統計的な数字の提示である。Frison-Roche の方だけに見られるものは、(これはR. Janonにも共通するが)、Blum内閣創設の Office du blé⁽¹³⁾ への非難⁽¹⁴⁾と住民の仏への忠誠心の称揚である。⁽¹⁵⁾

Camus の悲惨描写の具体性を示す例を列举してみよう：

空腹で倒れる生徒、食糧配布のために戦争さえ待ち望む住民、住民の50%が草木の根を食べている村、ゴミ箱あさりで犬と争う子供たち、昼食無しの生徒が半数にもなる学校、体重25kgの栄養失調の老婆、救援物資が必要量の10分の1という状況、住民の40%が年収1,000 F以下(都市労働者で月給約1,200 F)、日当は8～10 Fで半分は現物支給、税金の滞納を差引いて渡す日当、1日の労働時間は12～14時間、医者は住民6万に1人の割合、高利貸は年利50～110%、等々⁽¹⁶⁾

である。こういった事実や数字はFrison-Rocheの記事には全く見られないものである。これを見れば、Camus がいかに事実を直視し、真実に肉迫しようとしていたかが分るであろう。

低賃金の原因についても、Camus は失業の増大が賃金引下げに容赦なく利用されていることにあると見ている。公定の日当は17 Fであるにもかかわらず、実際には6 Fしか支払われていない例がある。ところが公共事業が正常に行われている所では日当が22 Fにも

なっているのである。⁽¹⁷⁾しかし他の2紙ではそもそも低賃金が問題になることさえない。これは植民地的収奪の基盤の一つをなすものであるから、体制側の新聞が目をつぶるのは当然のことである。原住民の賃上げ要求に対する当局の対処の残虐さは37年9月のオリボー放火事件をみても分るであろう。⁽¹⁸⁾この事件は、都市労働者の10分の1程度の日当(4~6F)を2倍にする要求を行った原住民組合員に対して、当局側が放火事件をでっち上げて、逮捕、弾圧を行ったものである。この事件の控訴審の報道を39年7~8月に Camus が担当することになるのである。⁽¹⁹⁾

他方、Frison-Roche の方だけに見られるものの中では、原住民のフランス賛美の言葉を引用した所が最も特徴的である。それは最終回の記事の中で、在郷軍人会の支部設立式におけるカビリヤ人旧将校の演説を次のように引用したものである。

«C'est à croire qu'une mystérieuse et providentielle prédestination à joué: La France avait besoin de notre province pour parachever son unité, et peut-être la Kabylie manquait-elle à son harmonie. Mais nous, dont les ancêtres ne s'ouvrirent jamais à l'Étranger, à voir notre élan, la passion que nous avons de notre Patrie nouvelle, et l'enthousiasme avec lequel nous avons reçu le message lumineux de la France ne pourrait-on pas penser que nos aïeux appelaient déjà obscurément la France de leurs vœux informulés, [...]. (D. A., 17-VI-1939)

1830年に始まったフランスの侵略とその後の支配がまるで神意であったかのように讃えている。この旧将校は、それに続く演説の中で、自分たちの祖先を殺した仏侵略軍を、文明への開眼をさせた解放軍とみなし、彼らへの感謝のために記念碑建立を提案している。その上さらに、第一次大戦に参加したカビリヤ出身の兵士たちの流した血を仏解放軍兵士たちへの恩返しだと述べている。これは民族の魂を全く失ってしまった言葉であるといえる。

もともとカビリヤ人は自律心と独立心の強い民族である。彼らは1830年から始まったフランス軍の侵略に最後まで抵抗し、この地方が制圧されたのは1857年になってからである。また1871年に15万人が反乱の武装蜂起を行ったのもこの地方である。さらに第2次大戦後のことにはなるが、あの独立戦争(1954~62)においては、カビリヤは最強の拠点の一つであった。ベルベル人がほとんどであるカビリヤはアルジェリアにおいても独特な社会集団を形成しており、歴史的にみても、ローマ、アラブ、トルコの長い支配の下で、国家内での一種の独立性を守り通してきたと言える。

こういったカビリヤ地方において、フランス賛美の追従的言辞しか耳に入らなかったとすれば、Frison-Rocheの観察は一面的で表面的であったと言わざるを得ない。現実を直視すべきジャーナリストの目は持ち合わせていなかったようである。それどころか、彼はある農民にフランスへの祖国愛を述べさせて、それに感激のコメントを付け加えている。

«Ce qu'on ne sait pas assez en haut lieu, Monsieur, c'est combien nous aimons notre pays, et quand je dis notre pays ce n'est pas de la Kabylie que je veux parler, mais bien de la France. Nous n'avons pas besoin de crier bien haut notre "indéfectible attachement à la Mère Patrie"; nos actes parlent pour nous. [...]». Ce langage, je l'entendis par la suite un peu partout. Ça c'est bien le miracle français: conquérir les âmes! (D. A., 17-VI-1939)

魂を征服するということは、逆の立場から見れば「魂を売る」ということに他ならない。

「魂の征服」が本当に行われたのは、ほんの一部の人に対してであると思われるが、それを一般化して、奇跡だと言って喜こんでいるようではあまりにも現実から遊離してしまっており、被征服者の心の痛みを感じ取れるような感覚は全く欠けているとしか言いようがない。こういった感覚の欠如は、コロンを中心とした支配者側のフランス人全体に共通したものだと思われるが、これこそが後のアルジェリア独立戦争を泥沼化させた原因の一つであろう。

このような文章をみれば、Frison-Rocheの記事はその偏見と皮相性によって、Camusの記事の迫真性にはとうてい及ばなかったと言ってよいであろう。こういった論調が当時のアルジェリアの中道から右よりの新聞の大勢であったとすれば、A. R. 紙及び Camus の記事はジャーナリズムの本質である事実と真実の報道に例外的に忠実であり、しかもそれに十分成功していたと言えるであろう。

IV. 結論：«dire la vérité tout entière»

D. A. 紙のFrison-Rocheのルポルタージュとの比較を通じて、Camusの記事のいくつかの特徴が明らかになったと思われるが、それをここでもう一度整理しておこう。

まず、報道における政治的姿勢に関しては、Frison-Rocheは露骨なほどに植民地支配層及び当局寄りであり、植民地支配は当然の前提としており、当局の政策の正当性も論証抜きで肯定している。これに反して Camus は当局に対して批判的であり、植民地支配の欠陥とフランスの政策の不十分さと不当性を徹底的に糾明している。

次に事実の報道という面については、Frison-Rocheの記事には、風景、風俗の描写が多く、住民との会話もあるにはあるが、それも表面的で、彼には主として中、上層部の住民との接触しかなかったようである。Camusの場合は住民の最下層部にまで踏み込み、事実を具体的に描写するとともに、数量的、統計的にも正確に把握している。この事実の具体性という面では彼の記事は他紙の記事を断然引き離しており、彼のジャーナリストとしての目の確かさを感じさせる。彼は具体的事実と正確な数字の上に立って、フランス側の政策を個別性と全体性の双方において批判しているのである。

最後に報道そのものに対する基本姿勢即ち報道の倫理に対する両者の比較を行い、これをもって結論としたい。両者ともそのルポルタージュを始めるに当たって、それぞれ初回に、自分の基本的姿勢を表明している。それを両者の実際の記事を通して見て、その実際に果たした役割を検討しよう。まずFrison-Rocheは、

Pour parler d'un pays, d'une race, sans risquer de commettre de lourdes erreurs ou des inexactitudes d'appréciation il n'y a qu'une solution, c'est de s'installer dans le pays, de vivre au milieu et avec ses habitants, de gagner leur confiance, de converser librement avec eux, en dehors de toute influence étrangère, qu'elle émane de l'autorité française ou d'ailleurs.
(D. A., 8-VI-1939)

と一見もっともで正当に見える主張を行っているが、現実の彼の記事をみると、彼は自分に都合のいいものだけを取りあげ、不都合なものには近づかず、無視するという姿勢をとっている。だからこの基本方針の表明は結果的には世論操作の意図をカムフラージュする役割を果たしている。表面的には中立と公平を掲げて、実際には好都合な部分だけを報道するという方法は世論操作の不変の常道である。これは当局側の意図そのものであり、彼はその要求に忠実に従い、それをかなり巧みに代弁していると言える。

Camusの方はG. Bernanosの言葉を引用して、自らの覚悟と自戒を初回に次のように表明している。

Nous dirons notre sentiment à cet égard et nous le dirons sans réserves.
Car, si l'on en croit Bernanos, le scandale, ce n'est pas de cacher la vérité,
mais de ne pas la dire tout entière. (A. R., 5-VI-1939)⁽²⁰⁾

このように知り得た事実を全体的に報道することこそ、ジャーナリズムの基本であり、報

道倫理の根本である。この原則に忠実に全力を投入した彼の記事は、だから、今日でも読むに耐えるのであり、またそれに価いするのである。彼が1958年に *Actuelles, III* にこの記事を再録したのも、そういった意味での自負と自信があったからであろう。

(1984年12月)

〈 註 〉

- (1) CAC 3, pp. 269 ~ 275 参照。
- (2) A. C. R. P. P. によるもの。
- (3) Gallimard 社出版。
- (4) A. Camus: *Avant propos des «Actuelles, III»* 参照。
- (5) CAC 3, p. 270, N. B. 1 参照。
- (6) Ibid., p. 270 参照。
- (7) Idem 参照。
- (8) Ibid., p. 272 参照。
- (9) Ibid., p. 273 参照。
- (10) Idem 参照。
- (11) A. R., 6-VI-1939 参照。
- (12) Idem 参照。
- (13) この「小麦公社」の設置で自由売買による利益を失なったコロソ勢力は、公社に対する妨害を行っていた。その典型的な例が ≪Hodent 事件≫ (CAC 3, pp. 313 ~ 412 参照。)である。
- (14) Janon では第4日目 (16-XII-38), Frison-Roche では第5日目 (12-VI-39) の記事参照。
- (15) Janon では最終日 (25-XII-38) の記事参照。 F.-Roche の記事 (17-VI-39) (120-VI-39) は後出参照。
- (16) A. R., les 5, 6, 7, 8, 10, 12 juin 1939, 参照。
- (17) Ibid., 8-VI-1939 参照。
- (18) CAC 3, pp. 511 ~ 523 参照。
- (19) Idem
- (20) G. Bernanos の原文では ≪Le scandale n'est pas de dire la vérité, c'est de ne pas la dire tout entière, d'y introduire un mensonge par omission qui la laisse intacte au-dehors, mais lui ronge, ainsi qu'un cancer, le

cœur et les entrailles ≧ となっている。 *Scandale de la vérité*, in *Essais et écrits de Combat*, I, Biblio. de la Pléiade, Gallimard, 1971, p. 602 参照。